

# 仏教文化史上における日本墳墓研究の

## 歴史とその方法論的考察

和田 謙 寿

一

仏教が日本に伝来し長い歴史のもと、やがて上流階級から庶民層に伝播するにつれて、民間信仰としての祖先崇拜の気風と融合するに至った。菩提寺を中心とする檀信徒対象としての仏教の流れ、これを人よんで菩提仏教、または、葬式仏教と総称したのであった。一部には葬式仏教を忌避し、葬式仏教の普及が、仏教の衰退惰性に拍車をかけるものであると主張する人たちもいた。しかし、かかる意見を解せぬわけではないが、だからといってこれが正当な主張とは考えられえない。元来、仏教学に関する研究や教団に関する考察は、相当に高度な面まで考究せられてきたけれども、これを維持継続させるに役立った寺院建立発展の研究や、これら寺院の存続発展に寄与してきた祖先菩提（祀り場）の考察、つまり、一般

庶民を対象とした墳墓研究の面においては、案外、未知の点が多く存在したのである。また例え、寺院や墳墓を対象としたところの研究があつたとしても、その多くは著名な大刹寺院か、または著名人物を祀る墳墓などの場合に限られていたのであつた。もちろん、一部の大刹寺院や有名墳墓の研究も大切なものであつたのではあろうが、更に必要な事は特権的な者たちの考察ではなくして、むしろ日本の寺院や墳墓の大多数を占める庶民的、普遍的なものを対象としたところの考察こそ一層意義あるものとして考えられたからである。在家の側から考えた場合、祖先を祀る墳墓の役割は、特に忘れ得ぬ心のよりどころとしての存在となつたのである。ここに庶民生活と仏教との関連性を見出しつつ、墳墓を媒介とした研究の歴史とその方向性（方法論）についてを述べて行きたいと思う。

二

日本における墳墓の出現は至って古く、先史時代にさかのぼる。文献的にも墳墓または墓制に関するものとして、日本書記や古事記・万葉集の中にも見受けることができる。しかるにかかわらず、古代墳墓研究の歴史は割に近代的な事であり、わが国では徳川時代中期以降の事である。しかもその研究対象の多くは、歴史家や国文学者の手によって帝陵にむけられたのであった。元禄九年松下見林の著による「前王廟陵記」をはじめとして、蒲生君平の「山陵志」などは著名なものとして代表された。これらは厳密な意味で学術調査とは言いえぬが、古墳形式面の考察としては、今後の斬学の開発に大なるプラスを与えたといわれている。墓相学<sup>(1)</sup>的なものとしてはすでに、「徒然草」「吾妻鏡脱漏<sup>(2)</sup>」などの書中に、右大将頼朝公の墓所吉凶につき論じられているところから、相当以前に取沙汰されていることがわかる。そののち文政の頃知非斎高田与清が、「墓相惑問」「墓相小言」などの書を著し、これが日本墓相学の基礎を築いたものと思われる。本格的に墳墓研究がすすめられるようになったのは、実に考古学の発展によるところが大きい。明治初年以降考古学的な分野がひらけ、特に明治十一年大森貝塚で名声を博したモールス (Edward Morse) が先史考古学より原史考古学にも意を注

がれたことによって斯学がはじまり、ついで、ゴーランド (William Gowland) シーボルト (H. Siebold) ヒッチコック (R. Hitchcock) などの外国人、それに坪井正五郎氏や神田孝平氏などの輩出により、大いに古墳研究がなされるようになってきたのである。特に、ゴーランド氏は明治五年から二十年に至る大阪造幣局技師の傍ら畿内をはじめとして、山陽、山陰、四国、九州などの地方をも訪ずれて、古墳墓の外形や石室内の調査測定を行い、日本古墳墓<sup>(3)</sup>の性格や年代の位置付けに偉大なる貢献をなされたのであった。更に坪井正五郎氏は先史考古学のみならず原史考古学にも心を至され、武蔵国吉見百穴の調査にまでも意を注がれたのであった。明治十九年二月坪井博士による人類学会の創設は、関東を中心とした原史時代専攻の学者を数多く出現させる基をなしたが、その中でも特に、八木奘三郎・柴田常恵の両氏は代表的な人物であった。ついで坪井博士の業績は東大理学部人類学教室において、鳥井・松村・長谷部の三氏によって受けつがれ発展していったが、他方、三宅米吉氏を中心とする東京帝室博物館側においても、原史時代の研究を考古学会のもと高橋健自氏、和田千吉氏などによって押し進められていったのである。これらの研究の上に更に西欧的な色彩をとり入れられて、考古学研究方法を具体化され、本格化せられたのが浜田耕筈氏であった。宮崎県知事、有吉忠一氏の「西都原古墳群の発掘を建国

と関連してとりあげたところの論説」ならびに、関野博士らによる「朝鮮古墳の調査」は浜田氏のそれと共に、大正期における考古学の立場をいやが上にも転機向上せしめたのである。時代と共に考古学そのものも細分化せられ、同じ古墳時代の研究といえども、古墳の外形の研究、内部構造の研究、副葬品類の研究、石棺の研究、埴輪の研究など個々の研究にも重点が置かれるようになってきたのである。つまり、古墳文化全般においては、浜田耕笹氏、梅原末治氏、後藤守一氏、石井周作氏、森本六爾氏、大場磐雄氏、樋口清之氏、斎藤忠氏、小林行雄氏などの諸氏が、大正から昭和にかけて、この道に尽力せられてきたのである。歴史時代における墳墓の研究法は明治の頃までは大体二通りの形式で行われていた。一つは、江戸時代中期頃から行われた文字の考証学的方法である。その多くは歴史家や国文学者の間で行われたものであった。墳墓の発見によって得た墓誌や墓碑の銘字を金石文の立場から考証するものであり、墳墓そのものの研究からは第二義的なものであった。他の一つは、著名偉人の墓地を探してその真偽を確かめ、墓所の一覧表をつくるのに懸命になるという探墓者型であった。老樗軒の「墓所<sup>3</sup>一覧」をはじめとして、この伝統は現在にまで及んでいる。その他、時山弥八氏の「関八州名墓誌」や山本東海氏の「平安名家墓所一覧」西村兼文氏の「京都墓所一覧」「江戸名家墓所一覧」などの

仏教文化史上における日本墳墓研究の歴史とその方法論的考察(和田)

場合がそれである。水戸の国学者である中山信名の「墳墓考——一卷」——(百家説林中に収められている。)——や、江戸の人、赤沼常信の著による「赤沼掃墓叢書」なども前者にならったものと思われる。かれらはただ単にかくれた偉人の墓をみつけどすだけのものではなくして、当時の状況や伝記などと比較検討せられて、世人の精神生活のため、郷土史のために偉大なる貢献と便宜とを与えられたのであった。ついで明治から大正に入るや、前述の金石文や文献的な立場より、人類学や考古学、美術学などの手による直接的・論理的な墳墓の研究がなされるに至ってきた。つまり遺物と文献とを加味されたところの調査研究法であったのである。とくに、朝鮮や中国大陸との比較研究や歐洲の考古学的方法論がわが国それに加味せられて、飛躍的な発展を遂げんとしたのである。明治三十二年「仏教芸術の研究」中に所収された——本邦墳墓の沿革——において、平子鐸嶺氏は科学的に中世の葬制についてをとりあげつつ、墳墓の沿革を印され、更に八木契三郎氏も明治三十五年に「考古便覧」の中に「墳墓の沿革」と題して文献と共に遺物をとりあげ、両者配合の上で述べられているが、そこには前の時代に比して方法論的に多少の進歩がうかがわれた。このうち、この種の論文形式が徐々に発表せられていったのである。大正八年高橋健自氏の「史林」第四卷第二号における——中世の墳墓——をはじめとして、雄

山閣発行「考古学講座」中の森本六爾氏の「墳墓——後藤守一氏による「仏教考古学講座」第一巻中の「墳墓概説——各氏の分担執筆によるところの雄山閣版の「墳墓の研究」などがそれである。中央史的な立場と言おうか、それとも総括的な立場と言ふべきか、統一的な中味の豊かな学問体系をつくりあげるためには、充実したところの基礎の累積が必要である。それだけに地方史的研究が重要なカギをにぎる導火栓ともなる。昭和十四年に坪井良平氏が「考古学」第十巻六号中に掲載せられた——山城木津惣墓標の研究——や日野一郎氏が「古代」三十五—六号中に掲載せられた神奈川県山北における中世武士の墓地例をとりあげられての——中世墳墓の一形態——中川成夫氏が「地方史研究」第十巻三号中に掲載せられ——中世考古学の諸問題——で扱われた墓制、墓標の考察。赤星直忠氏が昭和三十七年に「日本歴史考古学論叢」中に載せられた——中世墳墓の一形態としてのヤグラ——などの力作は、いずれも地域的な資料として斯学のための重要なものとなっている。ただ遺憾に思われることは、これらの内容の殆んどものが歴史時代のものとは言え、中世を含むそれ以前のものであり、つまり、奈良・平安・鎌倉・室町時代のものを対象にしてとり扱い、現在の墳墓、とくに、直接われわれの生活と由縁ゆかりの深い近世以降のものを内容にしたものはほんの微々たるものであった。たとえば、「江戸時代の墳墓」と題する項目であ

っても、それはただ単にお役目的に素通りの説明をなしたものにすぎず、中身の無いものであった。もっとも一般庶民の墳墓として石塔を有するに至った時代は、せいぜい江戸時代中期以降のことであり、それ以前の墓地は円く築いた盛土の上に小石が置かれているか、或いはまた、しるしとしての小木が植えつけられている程度のものにすぎなかったのである。かような点からおして江戸時代の墳墓研究は、やや停滞したかの感があった。しかし、最近の民俗学的方法などの進歩により、徐々にこの種の研究も再び行われるようになってきた。井之口章次氏による「仏教以前」(昭和二十九年)や、最上孝敬氏によるところの「詣り墓」(昭和三十一年)などの著書がそれである。両氏は両墓制の問題や墓にまつわる葬制の問題。仏教や民間信仰を通しての供養習俗の種々相を総合的にとりあげ、庶民を中心としたところの墳墓に解明を与えんとした人たちである。とくに、両墓制の問題は従来、あまりに注目せられていなかっただけに、当時の人をしてそのあり方に大きな感銘を与えた。元来、両墓制について、その熟語こそ示されていなかったけれども、両墓制的な考え方を述べられた者については、江戸時代の後期、または大正期にそれぞれ存在していた。しかし両墓制に対し間接的ではあるが論を下され、世間に紹介されたのは、昭和六年柳田国男氏が「人類学雑誌」五百号中に「葬制の沿革について」と題して

発表されたのがはじめであろう。「埋葬した場所と供養して

ている。

石塔を建てる場所とを区別している風習。」柳田国男氏の発表以来、この種の研究に着目される者は実に多く、辻井浩太

### 三

郎氏の昭和五年十二月「地球」十四卷六号誌上に発表せられた―伊賀盆地における墓地の地理的考察―や、昭和七年「旅と伝説」六卷七号、誕生と葬礼号の誌上での発表、大間知篤三氏を主軸としてなされた昭和十一年、山村生活調査第二回報告書に掲載せられた「両墓制の資料」（両墓制の名称が直接あらわれた。）同じく「墓制覚書」など、その他、両墓制に関する研究は、古いものとしては、「民族と歴史」をはじめと

私が一般民衆の墳墓に興味をもち、それに着眼しはじめたのは、昭和二十八年の頃と記憶している。そのうち、昭和三十年に駒沢大学地理学科主任教授の桜井正信氏と共に、「宗教文化の諸問題に関する研究」（駒沢大学宗教社会研究所発行）なる著書を刊行し、神主と位牌、民間信仰と墳墓との比較研究を試みつつ、―位牌の影響を受けた墓石の研究―ならびに、―江戸時代の墓石と民間供養塔との関係―と言う論題のもとに、江戸時代から現代に至るまでの墳墓型式の変遷とその発展過程や特殊性などについての私見を加えたのであった。更に昭和四十五年四月に「日本庶民仏教の研究」（駒沢大学仏教民俗学会発行）の著書を刊行し、その中に―日本庶民墳墓様式構成の条件―と言う論題をかけた。庶民墳墓様式構成発展の条件が如何なる立場のもとに、どのようにして、これまでに成立発展してきたものなのであるか。"と言うことについて、民俗学、歴史学、社会学、人文地理学などの立場について述べてきたのであった。それとは別に、日本墳墓の大様を知り、墳墓研究のヒント、特に、江戸時代以降の墳墓を焦点としてつくられたところの、下記の文献（拙著）のあることも紹介しよう。つまり「墳墓の研究」昭和三十八年（駒沢大学宗教社会研究

所発行)「日本墳墓の考案」昭和四十五年(駒沢大学仏教民俗研究会発行)の二書がそれである。ただ本書は大学での講座用としてつくられたものではあるが、数多くの図版の挿入は一目して現代墳墓の様式と、その傾向を理解し得る点ではプラスがあるものと思う。更にまた、石造美術の面より墳墓研究に協力されている人として、昭和の初頭における天沼俊一氏の「石造多宝塔」と宝塔に関する執筆(仏教美術第九冊)・昭和五年跡部直治氏著による「史蹟名勝天然記念物」第五集中の「石塔の話」また、川勝政太郎氏昭和十四年の「石造美術」(スズカ出版発行)をはじめとして、「日本の石仏」「日本石材芸史」更に、日野一郎氏、昭和二十八年「史迹と美術」中に掲載せられた——墳墓標識としての石造塔婆——の論文などが著名なるものであり、氏は、石造美術的見地のものと考究せられている。そのほか、中世以降の墳墓研究の面で忘れる事出来ない人物に、板碑研究家としての服部清五郎氏や中島利一郎氏、稲村垣元氏、それに塔の研究家としての著名な石田茂作氏や井川定慶氏、跡部直治氏などがある。板碑の研究は関東において特に栄え、明治二十二年白井光太郎氏の——板碑に就いて述べ——の論文が「人類学雑誌」三十号に掲載せられたのをはじめとし、昭和八年服部清五郎氏の「板碑概説」の大作によってようやくその体系化がなされたもようである。また、石田茂作氏は大作、「日本仏塔の研

究」において、全国的にまとめられた石塔の源流とその発展分布過程に関する資料を、考古学的な立場のもとに集大成せられたのであった。跡部直治氏は、仏教考古学講座(雄山閣版)や史蹟名勝天然記念物・史学関係の書物に、位牌をはじめ、五輪塔、宝塔、宝篋印塔など、多くの論文を発表せられ、文献中心的な立場のもとに斯学に専念せられたのである。その他、藤沢一夫氏による「墳墓と墓誌」(日本考古学講座中、昭和三十一年河出書房発行)・稲村垣元氏の「武蔵野の青石塔婆」(昭和三十九年)・藪田嘉一郎氏の編による「五輪塔の起原」(昭和四十二年綜芸舎発行)・千々和実氏の編による「武蔵国板碑集録二」(昭和四十三年小宮山書店発行)・土井卓治氏による「石塔の民俗」(一九七二年、民俗民芸双書版、岩崎美術社発行)・佐藤米司氏による「葬送儀礼の民俗」中の両墓制の項、(一九六八年、同上の社発行)などの論文や著書がある。土井氏の著書「石塔と民俗」においては氏の二十五年間にわたる墓塔に関する研究過程を、民俗信仰の立場で究明せられているのは注目にあたえする。千々和氏も現在尚、板碑をとりまく種々相について地道な研究をなされ、その成果を期待されている。また、久保常晴氏は「歴史教育」十巻三号において——墳墓研究の現状——三宅敏之氏は「日本歴史」一六〇号中において、——日本考古学の問題——と言う標題のもとに、それぞれ、従来の墳墓研究を要約せられると共に、その問題点

を指摘せられている。更に、純粹なる墳墓の研究上からみたならば、必ずしも正統なる存在とは考えられぬが、庶民の間に墓相の研究がさかえたのであった。これらも民俗学・社会的な立場より系統立つてとり扱ったならば、今後まだまだ意義あるものとして開拓せらるべきものである。元来それは、何れかと言うに、迷信的なものとして結ばれた傾向が多く、しかも理論的・系統的な面に多少弱点があったように感じられる。墓相に関する伝説は非常に多く存在し、その上限は、伝説的には聖徳太子の頃にまでもさかのぼるとせられている。しかし、真実的なものとしては徳川期文化文政の頃、

高田与清(高田松屋)と称する国学者によって「墓相惑問」「墓相小言」が刊行せられたのがはじまりであるとせられている。(墓相小言は高田氏が墓相につき講述せられたものを、のちの弟子たちが必要な部分をアレンジしてつくられたものであるとせられている。) もちろん中国からの影響のあったことは確かなところであろう。近代墓相学としてのわが国に狼煙ろうえんがあがったのはそう古いことではなく、村田天然氏による、昭和三年発行の「墓相学秘伝書」によるものであった。ついで昭和四年多田幽通氏の「主婦の友」の誌上における——墓相と家運の成衰——更に、昭和六年、宮司、矢島俯仰氏の「家運の繁栄する墓と衰微する墓」と題しての発表であった。最近の文献としては、昭和二十八年に東京徳風会が、故松崎整道氏を

追悼して出版された「墓碑と家運」同じく昭和二十八年に出版された蓮見昌紀氏の「正しい墓の建て方と紀り方」、更に昭和三十四年弘文堂書房発行の「先祖の祭祀と家庭運」昭和三十九年神宮館発行の「お墓の話」昭和四十四年芸文書より矢島俯仰氏が「墓相」——正しいお墓の建て方——などが重版せられている。これらの書中を流れている一貫した内容は、先祖祭祀の必要性と、家庭繁栄の相関性についてを各種の例話とともに、引用して述べられていることである。学問的と言うよりもむしろ説教調というところであり、在俗的な信者の間に広く愛読せられている。

この数年来、江戸時代以降の学問的な墓石研究は、殆んどと言ってよいほどなされていらない。例え行われていたとしても民俗学者が葬送儀礼などを綴る際に、その一環として両墓制や墳墓習俗を紹介しているにすぎない。

ただ、最近における墳墓の研究に、新風を与えたところの尽力家、失眼の墓石研究家として著名的存在であった佐藤裕氏を挙げることができる。氏は医学者と言う変り種の学者であるばかりでなく、盲人と言う悪条件にもかかわらず、日本の墓石を限なく巡検され、盲者の持つ、するどい感覚を生かしつつ、分類学的な立場のもとに文化の流動性を追求し、墓碑の調査に献身せられてきたが、とくに、NHKでの二回に渡る調査報告には誠に意義あるものがあつた。ここに、氏と

私のかつての共同調査による巡検方法の足跡についてを記してみることとする。

#### 四

墳墓は一見無雑作に雑然と建立されているかのように見られるけれども、よく考えてみると、二一三〇〇年と言う永い

間の歴史のもとに、数百人、いや、数千人と言う多くの人たちによって何代もかかって次々に建立せられたところの意義深きものなのである。しかも、僧侶が法名をつくり、石工せきくがそれを刻むときも、施主がその費用を捻出し建立するときも、皆、その人々の最高の意志と知識とを傾倒して尽力したものである。これを大きな眼で眺める時、思想的にも文化的にも、経済的にも、時代の流れに逆ってはいないのである。若しも逆ったつもりでも、大局的には時代の流れの中に同調していたのである。つまり、その実体は大自然の法則に従っていたのである。政治や経済の歴史が因果の法則に則っているように、また、文化そのものも各時代に分けられて時代色を反映しているように、墳墓の場合においても、何か多くの法則により支配せられているように感じられるのである。墳墓は我々の祖先が残してくれた歴史的な文化遺産であり、それが例えどんなに美術的には価値がなくとも、どれも貴重な遺物であって、これ以外に残してくれた永久的な祖先の遺物は、殆

んど見当らぬと言っても過言ではない。かように考えるとき、墳墓の価値と言うものは一段と高まってくる。かかる、この膨大なる遺物は放っておくわけには行かない。この墳墓の一基づつには全霊がこもっているもので、これを学問的に一定の条件に従って探究調査をしたならば、必ずや法則が見出される筈である。

名碑や古碑の多くは既に従来の学者が調査をして、いつでも参考出来得る立場がとられているが、江戸時代以降の墳墓についてはその殆んどが、未だ手をつけられていない現状にある。かかる庶民の墳墓が、この墓石学の研究対象として今後総合的に調査されねばならぬのである。江戸時代の墳墓と現代の墳墓との分布状況は地域的に多少の較差はあるも、全体的に略半半になっているのが常であり、その型で大体は區別する事が出来る。昔日においては、皇族、貴族とか殿様、地方の領主などの有名なしか墳墓は建立されなかつた。寛永の頃から徐々に庶民の間でも建てられるようになってきたので、庶民墓地には時折寛永以降の墳墓が残存している。もっとも寛永の頃のものには、僧侶とか武士、または有力者の墳墓であるが、歴史的には、余り文献に出ていない無名の人々と言う意味で、やはり庶民のものとなってしまう。どこの家でも建てられるようになったのは元禄の頃からである。従つて元禄からはその数も非常に多くなるのが一般的である。墓



石学はかかる全国のどこにでもある庶民墳墓（含墓地）を具に観察調査して、今日に至るまでの民家との生活の歴史を比較研究するところの学問であり、俗に言われる墓相学的なものではない。

墳墓研究の方法は一般に調査と整理との二大別にして考えられているのが通例である。つまり、第一の調査は、整理して学究する材料を現地から蒐集してくる事であるが、調査そのものが既に研究対象自体でもある。調査は観察と記録に終始するが、調査には、墓地における墓石調査と庫裡などでの住職、または檀家の人たちを中心とした聞取調査との二者に分けられる。第一次産業（反収）二次産業（名産）三次産業等、経済、産業、人口、交流、移動、信仰心……史書のみ予備知識では得られず、現地を踏んで始めて知る知識が必要である。調査における第二の作業は、墳墓類型による文化圏の境界を知るための調査であって、白壁、倉造り、格子戸造り等、庶民建築上の目立つものや、家庭食の調味法、農具、勝手用具、方言、等に至るまでの観察眼とそのメモである。第三の作業は、帰ってから後の整理と分類の仕事だが、疲れた後の整理を終るまでは調査のための旅行は終わっていないと心得べきである。この整理の結果によって仮説は修正され、更に次の企画が産み出される。この机上での学究と共に文献や資料の研究がある。ただ、江戸時代の墳墓に関する直接の文献

は殆んど見当らぬが、せめて間接的なものだけでも、あらゆる文献より探り、目を通しておく必要がある。では、かかる墳墓調査の結果、如何なる事が知られるのであろうか。つまり、墓石学研究の成果である。

元来、この学問は新しい社会科学の一つであり、開拓分野も浅いので実際のところ正解は不可能であらう。ただ、ここで言いえることは、江戸期庶民生活の中にどんな法則が横たわっているのか、それを発掘するのが目的である。暗中摸索の場合には墳墓の型式から入るのが通例である。つまり、墓型の分類からである。続いて、年号と組み合わせ、編年の調査になるのが順序である。ここまでは誰でも実施する段階であるが、注意すべきは、ともすると初心者は奇型・珍型・特殊な墳墓に目を奪われ勝ちになることで、在俗的にありふれたそこに沢山存在する一般的なものには、目をふれないと言う人間のもつ通弊に陥入る事である。一番数のあるポピュラーなものの中にこそ重要な法則が含まれているのであるから、或る任意の塞地へ立ったら、何型が一番多いかを見て、一番多いものに比重をかけ調査することである。同様な立場より、全国共通型と地域的特殊型とを分類せねばならず、こらに文化圏型発見の糸口が開かれるのである。第二段階としてこれらの文化圏型が解明された以上、これを目印として種々なる方法を考えることができる。例えば、各文化圏範囲

の決定、特に圏境の線を決定する時には種々なる壁が立ちばかり、その判断に苦しむところであるが、それがまた興味のあるところともなる。その例として、秋田型と南部型の境界をなすところの鹿角郡や、なすわりといもわり型の境界をなす気仙沼地方等は、柳田国男氏が民俗学的秘境と言われたところと一致する。また、南部愛知の田島地方は、会津型が主力をなすが、関東型、郡山型の混入している三型、三色の圏境点をなす。案外、郡山型の多いのは意外なことで、郡山型を追跡調査して行くと侵入路が年号を追って解明せられるのである。また、江戸時代中期以降を全国的に風靡した櫛型墓石で日本を分類すると、長野・山梨・静岡の三県に限られた以東の東日本と、石川・岐阜・愛知の三県以西の西日本に西分けされ、日本は文化的に墳墓面より二州より成る合衆国的と見たくなる程で、そのものさしとなった櫛型のラインは、金沢を撓めてできる。弾性的立場を内蔵する曲線であり、東日本ではコンパスの遠心曲線であるように、その世界は次元を異にしているように感じられる。この金沢ラインは日本古来の曲線で、西日本に広く分布し全体的に一文化圏となり、奥州の如く小文化圏的な群立はない。また、この種のものも早くより北陸さらに羽越地方へ延びて、津軽海峡周辺にまで及んでいる。これらの西日本の文化は、奥州を日本海より北上した後、河川を逆上し奥羽山脈を越えて奥州山塊深くに、

また、表日本へと侵入し、太平洋より北上してきた東日本文化と、青森、秋田、岩手三県の境で二大潮流が交流している。ただしこの丸櫛型による西日本文化の侵襲は墳墓史上の第三波であつて、第一波は神戸石によるもの、第二波は越前青石によるものであり、まさに墳墓は人々の移動する状況を克明に知らせてきたのである。そこへ行くと東日本の場合は独自の発達を示してきた。つまり、東日本の中では数個のブロックに分けられた。秋田、南部、宮城、会津のみは文化圏上特に、奥州の四大雄藩であるのは何故であろうか。この地、みちのくでは、文化圏としての境界は山脈よりも河川である場合が多い。つまり、文化圏は当時代の頃には山は越えられたが川は渡れなかつた模様である。また政治的には敵対的であっても、民衆的な文化面においては別に区別はなく、いずれも同国的な立場であつたのである。江戸の時代は従来の歴史で述べられているほど、庶民への法度は固く守られていなかったらしい。苗字も天明の頃より庶民間に使用せられていた形跡があるし、関所せきしよも一部の例外を除いては自由に往来していたらしい。庶民生活、常民文化にはその割に政治的国境はなかつたように思われる。墓型を年号と組み合わせ考えた場合、一寸数えてみただけでもかかる事々が解明せられるのである。尚、第三段階は法名からの研究であり、第四段階は墓籍簿完成への換起運動であるが、このような研究は前者に

比して複雑多彩の問題と能力が必要となり、その解明も困難なものとなる。もちろん、墳墓研究に関する直接的な考察と、その研究を側面より維持するところの間接的な補助学のある事を忘れてはならない。これは必ずしも文献にのみ頼る事ではなく、数多くの実地巡検調査が必要となる。更には江戸時代の墳墓建立のための値段、開眼供養などに要するところの費用など、強いて言えば当時の生活費や人件費、おかね錢貨の事情など、経済学的な問題をも生じてくる。地質・鉱物学を中心とした全国の石切場と石材々質の諸問題、為政的な移封など、地方史、郷土史に派生すると思われる研究対象の範囲は実に広い。墳墓についての文献、資料、特に江戸時代以降のものは極めて少ないので、文献を探すのも一苦勞である。墓地には墓石の他に塔婆もあり、本堂や位牌堂には位牌もある。また、庫裡には過去帳があり、墳墓から供養塔としての区別、灯籠、更に墓地や境内中には墓石に似て非なる庚申塔などもある。これらは民俗学や考古学者の間で研究されている。屋根型角碑を筆頭として、墓石の頭部や意匠などについては建築学の知識も必要とするであろうし、その呼称は江戸時代の髪形や服飾品の多くになぞらえる事物の多いので、江戸時代庶民の上方、江戸方の生活服装に関する研究にも一応目を通さねばならない。霊に関する問題・統計学・集落学など、隣接学科は多種多彩を要する。先ず調査をするに当って必要

な事は、墳墓調査をするための寺院の選択決定である。宗派毎に全国寺院名簿が図書館などにあるが実際のところ入手困難であり、各県庁の総務課に、または宗教課で宗教学人名簿を受けることにしたい。殆んどの場合各宗派の全部が登録されている。日本国土地理院の五万分の一の地形図により、大体その位置がわかる。地方都市ならば更に詳しい一万分の一の地図があるので、これならば寺院名まで附してある。その市町村内の何カ寺かある中で、どこの寺を選ぶかは任意である。統計学上からは無作為であるべきだが、旅行中には実際として駅から近いところを選ぶ事になり易い。ところが駅前や市内の寺院は地価の昂騰のあふりで墓石は整理されつつあり、地方都市では共同墓地をつくって寺院内の墓石を全部郊外の一ヶ所へ集める傾向にあるので、(名古屋市・青森市・岡山市、等)直接寺院へ問合わせるのも必要である。従って現在においては、郊外の寺院に昔ながらの墓石を見かけることが多いので、遠くて時間のかかる欠点はあり得るが、欲する対象資料がそのまま保存されているので捨て難いところとなる。但し郊外部の寺院は経済力の点で落ちるとか、石工の技術が拙劣など、市内寺院のものよりも亜型のものが多く、百分率も市内寺院の場合と異なるので、両者を比較検討することが必要である。問題は、どこの寺院に墓石が何基あるかが大切だが、当の住職すら確答出来ぬのが現状である。普通一

坪で二基宛の計算をすれば大きな誤りはないとせられている。一概には言えぬが、少ないところで二—三〇〇基、中位は五—六〇〇基、多くて一〇〇〇基前後が普通である。五〇〇〇基、一万基の寺院も稀にある。三〇〇〇基以上の墓石をもつ場合があると、その他域には寺院数の少ないのが通例である。注意すべきは有名な寺院の中には墓地のない場合があつて、京都がそのよい例である。観光的古刹や殿様寺も特殊内容になるから、庶民生活とは程遠いところのデータが出るので注意を要する。しかし、そのようなところに往々にして文化圏型の発生が保存せられる場合もある。宗派別では従来の経験からして、浄土真宗には墓石は少ないので止めるべきである。すると、曹洞・日蓮・浄土・真言・天台宗などが無難だと言うことになる。宗派別により墓型が異なるという例は少ないが、浄土真宗の場合、北陸地方を除いて割に小柄のものが多いのが常である。帰語等は宗派により異なる。法名(戒名)の場合も当然である。故に調査の場合には二—三派以上を選ぶのが手落ちがなく妥当と言えよう。

一番多いところの墓型についてはその年号を厳密にとる事が大切である。東日本では自然石、F<sub>1</sub>Ⓔ(船型碑)F<sub>3</sub>Ⓔ(五輪塔)宝(宝塔)の他に、羽越型、坂状、等である。即ち、自然石、若しくは一面に研磨をかけて刻字をした関東の船型碑、西日本の板状碑、いずれも扁平碑であるから、これらには注

意して、地元の石質と異なる場合が多いので石材にも気を配る。これらの墓石は少数なので、大きさの測定、刻字の記録は詳細を極めることが肝要である。またこれらにはしばしば下突起があるので検査する必要もある。この時代には殆んど庶民の墳墓はなく、指導者階級のもの、従つて他地方よりの赴任したと思われるものが多いので、他地方の型がよく見受けられる。また、この時代の刻字は薬研彫である。帰語や仏号にも見慣れぬものが多く、当世使用のせぬ字もしばしば、維時、慈父、慈母、孝子等もこの時期である。各型の最古のものに上限を附すに、元禄以後のものは(a)角碑が出現して混在するので、墓型は多型化してくる。(b)そろそろ庶民が建墓し始める時代である。それ故多様化するのみならず、数的にも増加する。ここでは数の多い墓型を二—三メルクマークして、百基毎に百分率を出し、三〇%以上を抜きそうな型に注意を怠らない。時代を降るにつれて%の下るものとの差が出てくる。また各型の上限は三〇パーセントを越え、上下は元禄に達し、以後絶ゆる事のなきは文化圏型なので他寺院でもこれを検証せねばならぬのであろう。奇型・珍型の墓石については必要以上の注意を払うことはないであろうが、数墓以上を越えた場合にはメモをしておく必要があるであろう。

(一) 年代的には寛永以来、現在までに至る三百五十年の墓石歴だが、明治以後建立の現代は墳墓は半数を越えていないの

が一般的である。大都會の中には五割以上の墓地もあるが、過疎地では二―三割となる。古い無縁仏は整理されて新らしい現代墓が建つから、現代墓の占める百分率は漸増して行く可能性がある。

(二) 現代の墓石を含めて一墓地の墓型百分率では、三割以上から占める墓型が共存するとすれば最大二種類までで、三種類以上の場合には没んどあり得ない。墓型の源地、つまり発祥地を決定するには、或る地域(都市)の任意の墓地における墓型の百分率をあらかじめつくる。1、三割以上を占める墓型をマークする。2、その墓型全墓の年号を調べて上限を決める。3、これをその地域(都市)の周辺部と同様に調査して百分率の上限も、これ以下である事を確かめた時、この墓型はその地域(都市)都市に発祥したものと決めて差しつかえない。一般に角碑は元禄頃から見られるので上限が元禄まで逆ることができ、以後連続して今日まで続き絶える事がなければ、この地域(都市)はその墓型の「ふるさと」と決めてよい。

斯くして誕生地の明白になったものは発見順序に従って、例えば、埼玉県下里型(昭和四十一年)・郡山型(昭和四十二年)・秋田型盛頭(昭和四十三年)・仙台型のいもわり(昭和四十三年)・北上川型のなすわり(昭和四十三年)・盛岡型のまる頭(昭和四十三年)・会津型(昭和四十四年)・松本型(昭和四十五年)・名古屋型(昭和四十五年)・大阪型(昭和四十五年)・

博多型(昭和四十三年)・鹿児島型(昭和四十三年)等とするすことになる。

今や墓石も大量生産化(国外より墓形のままで輸入せられるものもある。)されて、墓型も一―二種の全国共通型(実際には大阪型と松本型が主を占める。)に塗りつぶされようとしているが、以上の地域に行くと、これらの侵入を許さず夫々広い範囲に亘って今もなお、郷土色を墓地に練り広げている。この発祥の地を中心としてその地域周囲に範囲を広めていく。中心部より遠のくに従ってその上限も年代的に下り、百分率も少なくなる。従ってこの地域はその墓型の文化圏と言って差しつかえない。『この文化圏の範囲は江戸期の一国や現代の一県に一致する事は少なく、むしろ、数ヶ国の広範地域部にわたり一致する事が多い。何故この地方にこの墓型が発生したのか、とか、その文化圏の広さが示す意味は、気候や地質、交易、精神風土と密接な関係がありそうだし、今後の歴史学や民俗学などによりその比較検討を待つ次第である。』  
『第一次文化圏型』『現代の地域的な墓石型は、全国共通型におされて三割は保持し得ぬが、『昭和二十年の時点に逆りその観点をうつしてみると、京都型(昭和四十五年)がそれで、『第二次文化圏型』』立脚点を更に『慶応四年に建てると、白河型(昭和四十三年)・金沢型(昭和四十三年)・宮津型(昭和四十五年)』が出現し、『第三次文化圏型』』『享保二十一年に前

進させると江戸型(昭和四十年)・羽越型(昭和四十三年)を決定することが出来る。『第四次文化圏型』第一次文化圏型は持続年数も長く広範囲である。第二次以下になるにつれて流行年も短かく、局地化する傾向にある。

## 五

以上述べた如く、墳墓の研究は長い間の歴史と共に、諸地方の特質や文化を加味しつつなされてきた。しかもその多くは文字にとらわれ、型式にとらわれながら編年研究様式などの発見に重点が置かれ、調査がなされてきた。つまり、金石文的に、考古学的に、歴史学的に、民俗学的に、それぞれ墳墓の存在と言う個々の立場を中心として研究がなされてきたのであった。しかし現在、いや学問形態は、個々の独りよばりの考え方は許されない。もちろん、墳墓を通して個々に、歴史的、考古学的、年代学的、金石文的に眺めることも必要ではあるけれども、更に人間生活を中心として総合的な研究調査の成果が期待されるのである。つまり、墳墓を中心としての社会学的考察、自然ならびに人文地理学的な考察、集落学的考察、民族学的な考察を展開することも必要である。一群の古墳や墳墓を仲介として当時の交通路や集落の位置形態を考え、また、所在地名の研究を通してその地域の歴史性や民族性を探求し、更に墳墓の分布拡張やその発展ぶりによ

って、その地域の土地利用や経済事情の問題を考察するなど、ついには両墓制やその他の信仰性の問題を調査することによって、その地域の祖先崇拜観や倫理、精神面の問題にまでも到達せねば、解明出来ぬ場合も生じてくるのである。更にまた、近隣地域の文化的経済的な両面を考察する場合にも、近隣墳墓群の比較学的研究は大いに参考となり得るのである。このような点に立って考え合わせるとき、今後の墳墓研究より生ずる成果は、ただ教理的・信仰的のそれのみ留まるものだけではなくして、人類の幸福・人類のよりよい精神生活をなし得るため、あらゆる文化に通じ得るものでなくてはならぬと言う事がいい得るであろう。

参考文献については本論文の特質上、内部において紹介したので、ここでは特に省略する事にした。尚、直接墓に関連した単行本以外に、第二次的にその記事が部分的に掲載されているものも数多くある。日本民俗学会報・民間伝承・史蹟名勝天然記念物(刀江書院)・考古学雑誌・印度仏教学研究・仏教考古学講座(雄山閣)・古代史研究(朝倉書店)・歴史公論・民族学研究(三省堂)・伝承と歴史(同志者大学民俗学研究会)等、以上かかげた誌中には、各方面より評価高き意見が述べられている。